

月刊

いじろのとも

第九卷

六月号

和顔愛語

和顔愛語は

コミュニケーションの基本

おだやかな顔で

怒りや恨みや妬みの

ないことを伝え

やさしいことばで

思いや考えを

伝える

人と成れ

人として

人のところで

人と成り

人より多く

人に尽くせよ

人として

人のところで

人と成り

人に施せ

人の情けを

人生を考え直して

みたい人は（五四）

『聖書』解説（三〇）

マタイ福音書第七章を続けます。

二一 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国（みくに）にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者がはいるのです。

二二 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇跡をたくさん行ったではありませんか。』

二三 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣言します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』

この部分は、先月号に引き続いていきます。先月号は、偽預言者の見分け方についてでした。ですから、これら

の記述も、偽預言者に関しています。

まず、二一節ですが、偽預言者も「主よ、主よ」とキリストに呼びかけますが、しかし、そうした人は誰でもが「天の御国」に入るわけではない。いま話題になっていきます偽預言者はたとえ、そう呼びかけても、なぜなら、彼らが「天におられるわたしの父のみこころを行う」ことがないからです。

ということとは、天の御国に入ることと、天に居られる父の御心を行うこととは、同じことになります。

これまで、言ってきましたように、天の御国とは、いわゆる「天」にあるのではなく、どこまでも自分自身の中にあるのです。私の理論では、「他己」の無意識（潜在意識・精神の「ずい」）には「如来蔵識（神）」が宿っておられますが、そこが、天の御国ということになるのです。

では、その御国に入るとは、どんなことなのでしょう。それは、精神のもう一方の働きの「自己」の無意識にある「生命蔵識（煩惱）」と、天の御国である如来蔵識（神）とが一体となることです。無意識で統合されることなのです。無意識のことですから、意識してそうすることはできません。意識してできることは、ひたすら神（仏）を信じ、神と一体となろうと、

「こころ（情動 感情の働き）」と、
「からだ（感覚 運動の働き）」と、
「あたま（認知 言語の働き）」を、総動員して、
「努力すること（自我 人格の働き）」
だけなのです。そうしている時、人は、実に無限
に神に近づいているのです。しかし、そうできる人は、
残念ながら、現在では、滅多にいません。

では、「父の御心を行う」とは、どんなことなのでしょう
か。神は、無意識にあつて、他己の根幹をなすもの
ですから、父（＝神）の御心とは、私の理論でいいます
と、他己の働きそのものだと言えます。それを、私は、
「法をめざして、より善く社会的であろうとする」働き
と言っています。

「法」とは、哲学的に言えば、宇宙根源の原理と言っ
てもよいでしょうし、仏教哲学で言えば、空や無と言っ
てもよいと思います。さらに、言い換えれば、真実、真
理、仏法、神の摂理、などと言えると思います。精神の
働きとしての、これらの言葉は、自分への執らわれを棄
てて、完全に客観的になることではじめて、実現できる
ものです。つまり、客観的な法そのものに即して生きる
ことを求めるものです。それは、実は、無意識の神その
ものの働きと言えるのです。

では、「より善く社会的であろうとする」とは、何の
ことなのでしょう。めざすものは、根源的には神その
ものなのですが、しかし、めざしたからと言って、それ
が直ちに得られるわけではありません。無意識にあるも
のをひたすら求めるのですが、意識水準では、具体的に
は、一つには、自分の「こころ」の働きとして、自分の
「情動（欲望・情緒・気分など）」を制し（それは、い
わゆる怒りをしずめ、貪欲を抑えること）、「人の心を
感じるこころ」である「感情」によって、他者を尊重し
ようと努力することです。中国古来の価値で言いますと
「仁」を求め続けるということになります。

そして、もう一つには、自分の「たましい」の働きと
して、自分の生きているあかしや、自分の生きている意
味を見つげようとする「自我」と、他者の期待や規範に
したがって生きようとする「人格」との統合をはかろう
とすることです。漢字一字でいいますと、「義」という
ことになります。

この意識水準の「仁」も「義」も、完全な実現は、無
意識水準の「靈性」を磨かなければならないのですが、
実は、そのためには、逆に、前述のように、意識水準で
「法」を求め、聖者を信じ、その教えにしたがってひた
すら努力・精進しなければならないのです。このように、

意識水準と無意識水準とは、相互に影響を与え合い、規定し合っていると言えるのです。

こう見てきますと、「父の御心を行う」とは、根本的には靈性の発現（無意識の煩惱と神の統合）として、仁と義を実行するということになります。

さて、次に進みます。「²²その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によつて預言をし、あなたの名によつて悪霊を追い出し、あなたの名によつて奇跡をたくさん行ったではありませんか。』」

この出だしに「その日」とありますが、これは、「天の御国に入る」ことを、キリスト教で言ういわゆる「神による最後の審判」によつて決められることだと考えているために、その最後の審判の日のことを言っているのです。偽預言者が、いくら「主よ、主よ。私たちはあなたの名によつて預言をし、あなたの名によつて悪霊を追い出し、あなたの名によつて奇跡をたくさん行ったではありませんか。」と言つても、それは、偽であると思破られてしまい、天の御国には入れないで、地獄に落ちてしまうということです。

そのことが、次の節に出てきます。「しかし、その時、わたしは彼らにこう宣言します。『わたしはあなたがた

を全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』

なんと厳しいことでしょうか。キリストは偽預言者を、仏教でいう「縁なき衆生」として切り捨てています。キリスト教では、こうすることで、地獄へと落ちていかなければなりません。

ここに、宗教のもつ優しさと厳しさがあります。私は、これまで「真の優しさは厳しさを伴い、真の厳しさは優しさを伴うものでなければならぬ」といつて来ましたが、それは、こうしたことを言っているのです。ただ優しいだけなのは、社会に流されて生きていくだけです。ただ厳しいだけなのは、他者を無視した自己への強い執着を示しているだけなのです。

しかし、厳しさと優しさを同時にもっているキリストは、許すことができます。偽預言者が、性根を入れかえ、自ら偽であることを自覚・反省し、ひるがえって、ひたすら神を求め、キリストの教えにしたがつて、努力・精進するならば、キリストは、直ちに許すことができるのです。しかし、普通は許すことはなかなかできないことです。

なお、地獄はどこにあるのかということですが、これは人を救うための一つの方便にすぎません。

自作詩短歌等選

お母さんごわい

そんなこと
してたら
お巡りさんに
言うぞ
お巡りさんなんか
こわくないわい

じゃ

先生に言うぞ
先生なんか
平気のへいさ

じゃ

お父さんに言うぞ
お父さんなんか
怒らんもん

じゃ

お母さんに言うぞ
もう二度と
しないから
それだけは
やめてちょうだい

待望のつばめ

軒下に
孵化したつばめ
顔を出し

真の政治

真の政治は
自己と他己の統合
現代のように
自己ばかりに
傾いてもいけないし

墓掃除

封建時代のように
他己ばかりに
傾いてもいけない
そのバランスをとる
社会をつくりだすのが
政治

自分を守る現代人

自らを
ひたすら守る
現代人
自分の利益に
応じて感謝

墓掃除

墓掃除
させていただく
有り難さ
お花供えし
人のありけり

子は親の鏡

母みれば
子が見えてくる
保育園

一輪の紫陽花

紫陽花や
きょう一輪の
お手洗い

真実を笑う衆

真実を
聞いて笑いの
種とする
無明の闇を
さまよえる衆

自己と他己の中道

鳥が
左右の羽の
バランスを取って
空を飛ぶように
人は
自己と他己の
バランスを取って
この世を生きる

権威の喪失

民主主義
あらゆる権威が
失われ
民主主義
あらゆる信も
失われ

無知に気付かず

評論家
学者・世の人
みなみなが
無知に気付かず
他人を非難

信を欠きたる現代人

今の人
信を失い
通心が
できずそれだけ
孤立深める

為すべしとする議論

道が廃れて
仁がおこり
仁が廃れて
義がおこり
義が廃れて
礼がおこる
廃れたときに
廃れたことを
為すべしとする
議論がおこる
いまや
礼すらも
廃れんとしているが

自作随筆選

子どもの虐待

五月二十八日付け毎日新聞の三面記事欄に、『三女虐待死』母起訴へ 保険金七十万円を不正請求 傷害致死と詐欺未遂で 大阪地検」という見出しで、また、その事件に関わる解説が、当日の二十三面に「ささいなことで愛情うせ かわいくない自然に死なせる 検証長女餓死事件」という見出しで、わが子四人のうち二人を虐待死させた夫婦の事件が、載っていました。

私は、常々、こうした子どもの虐待事件には関心をもっていますので、すぐ読みましたが、これらの記事によりますと、長女は可愛くないので食事を与えず、餓死させていますし、三女は生命保険をかけたうえで階段から突き落とし、死亡させています。その残酷さに子どもへの憐憫（れんびん）の情がこみあげてきました。

この他にも最近、車の中に零歳児と一歳児の二人を八時間放置し、自分たち夫婦はパンチコに興じていて死亡させた例があったり、また、少し前ですが、夫婦で子どもを折檻し、箠笥の引出しに押し込めて出掛け、パチン

コをして帰って見たら死んでいた例などがありました。前述の毎日新聞の記事には、作家・柳美里さんの解説が載っていました。次は、その中の一文です。

「ただ、単にわが子を学歴社会に適応させようとしている親は過保護、あるいは教育熱心になり、規範を失っている親は親以前に個人としての快樂の追求を優先して、面倒な子育てから逃げるか、子どもに對する虐待に向かっています。現代の若い親はこの二つのタイプに二極化していると言えます。ノ規範を見失った現代社会は、親とは何かということが分からない親を量産しています。その結果、『カギツ子』よりさらに悲惨な『飢餓（キガ）っ子』を生み出しているのです。」

私も、現代の若い親たちが、管理中心の過保護・過干渉タイプか、放任・虐待（酷使）タイプかのいずれかに傾いていることを、言ってきましたので、右の主張には賛成するところがあります。でも、これら両極の基本にあるのは、「真の愛情の希薄化」即「他己の萎縮」であることを指摘できていない点で不完全と言えます。現代人は、知らないうちに自己を肥大化させているのです。人のことが分からなくなつて来ています。この事件はそのことを改めて気付かせてくれているのです。

釈尊のごとば（六九）

法句経解説

（二三九） 聡明な人は順次に少しずつ、一刹那ごとに、おのが汚れを除くべし、鍛冶工が銀の汚れを除くように。

難しい言葉はありません。でも、深い真理を述べています。終わりのところに、「鍛冶工が銀の汚れを除くように」とありますが、銀の汚れをどのようにして除くのか、私はよく知りませんが、この偈では、はがねを鍛えるように、時間と労力をかけて除くのだ、ということのたとえにしているのだと思います。

つまり、時間と労力をかけて、聡明な人は、順次、少しずつ、一刹那ごとに、自分自身の汚れを除くべきである、ということなのです。

私たち人間は、生まれたての赤子のとき、汚れ（この垢）はありません。私の理論で言いますと、未分化ですが、「自己」と「他己」は統合されているのです。自分が、あるがままにあるのです。何のほからいもありません。老子で言えば「無為自然」と言えます。

ところが、人間は成長の過程で、だんだんと、いろいろ

なことが出来るようになってきます。はいはいができて、歩くことができ、言葉を話すことができ、というように、さまざまに出来るようになります。

そうなりますと、実は、自己への執らわれが出てきて、はからうようになるのです。同時に、自分と他者の区別ができるようになります。私の理論で言いますと、自己と他己の分離と統合を意識することができるようになると言えます。他者に対して自分を主張することができるようになると同時に、他者に意識して同調することもできるようになります。それは、つまり、はからうことができるようになるということなのです。

余談ですが、このとき、甘やかして楽ばかりさせていますと、「自己」ばかり肥大していきます。わがままになると言えます。また、統制ばかり加え、自由を与えてやりませんと、他者の顔色ばかりをうかがうようになり、「自己」が育ちません。

しかし、何れにしても、人間は、悲しいかな成長・加齢（＝歳を重ねること）の過程で、自己と他己が分化し、その統合を常に迫られているのです。自分を主張したい気持ちと他者を尊重したい気持ちの間（はざま）を生きなければならぬように運命付けられていると言えるのです。それが、人間が、自分を意識し、自覚し、反省す

ることができるように進化したマイナスの代償であると言えるのです。ここに人生の苦しみの根源があります。自分の思いどおりに生きたいのに、そうなりません。そして最終的には、その苦しみは、「生きていたいのに、死ななければならぬ」ことに集約されます。

しかし、人間が精神的存在、自己と他己を分化させた存在となったことには、こうしたマイナスの代償だけではありません。いま、人類は生活の利便性や快適性ばかりを追求して、自己を肥大させ、ますますマイナスの代償を支払う窮地に陥っていますが、その自己への執着を棄て去ることで、動物にはない、素晴らしい境地に達する、というプラスの代償を得ることができるのです。それは、生死を超越した境地です。釈尊がよく言われる不死の境地と言えます。

しかし、その境地は、一夜にして達成されるものではありません。成長の過程で長年に渡って付けてきた汚れです。やはり、その汚れを落とすにも、それなりの年月がかかるのです。その年月は、付けた垢の多さや個人の資質に応じて、異なると思いますが、どちらにしても傷にありますように、「順次に少しずつ、一刹那ごとに、おのが汚れを除く」ことが必要なのです。

では、具体的に汚れを取り除くにはどうすればよいの

でしょうか。それは、常に申していますように、瞑想であり、ヨーガであり、坐禅であり、読経や写経であるわけです。こうしたものを一日したから、どれほど汚れが落ちたか、自覚することは勿論できません。何故なら、その汚れは、無意識に付いているからです。私たちにできることは、ひたすら、毎日、こうした修行に精進するだけなのです。現代人のように「取引する」ことしか知らない者にとつて、たいした効果も自覚できない行為を毎日継続することは、とてもできがたいことなのです。それだけ、仏法が廃れてきていると言えるのです。

(二四〇) 鉄から起こった鏽(さび)が、それから起こったのに、鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところ(地獄)にみちびく。

なんと的確なたとえであろうか。でも、現代人にとつて、後半の「悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところ(地獄)にみちびく」という部分が、ほとんど理解できないのではないのでしょうか。

と言いますのは、まず第一に、悪をなすということ自体が、ハッキリしなくなつて来ているからです。また第

二に、現代人は即物化していますので、悪いところ（地獄）という意味がほとんど理解できなくなっているからです。

悪がハッキリしなくなって来た、ということですが、それは善悪の判断が、相対的になって来たということの意味しています。何が善いことなのか、何が悪いことなのかの判断が、ハッキリしなくなって来たということですから。つまり、それらが、相対的になって来たということです。

それは、絶対な境地（解脱・悟りの境地）に達した聖人の教えが、ないがしろにされるようになって来た、ということでもあります。聖なる者も俗なる者も、同じ人格・人権を持った対等・同等な人間だと考えられるようになってきた、ということの意味しているのです。

こうした人の教えは、常に、絶対な真理を含んでいません。相対な境地にしかない人が、何万、何億、何兆、寄り集まろうと、そうした絶対な真理を得ることはありません。ということとは、相対なものは、絶対な境地に達した人たちの教えに、常に、謙虚に従って生きて行かなければならないということなのです。聖なる者と俗なる者は、どこまでも、対等・同等ではありません。悪をなすこと自体が、ハッキリしなくなって来たということは、

こういうことなのです。

次に、第二の「悪をなしたら、悪いところ（地獄）に行く、ということが理解できなくなって来ている」ということですが、それは、私たち現代人は、目に見えるものばかりを信じ、目に見えないものを信じなくなって来ているということに、その原因があります。目に見えるものとは、いま、まさに現実にあることです。そして、それが、個人の尊重という主張と重なりますと、それは、いまの自分の「情動（欲望・情緒・気分など）」に依じて目に見えるものである、ということになります。それは、自己への執着に依じて、現実が見えてくるということとです。自己への執着が強ければ、悪をなしても善をなしていると考えることができます。それは、その人のなす行為の社会的意味が消えていくということでもあります。その時々々の現実が自己の執着と相関関係を保つて見えてくるというわけです。そうなりますと、過去や未来すらが、たいした意味を持たなくなってくるのです。

過去は、自分を含めて人間がなした行いや自然に起こった事象で、現在の行為に影響を及ぼしているものですが、自己が肥大し、自己に閉じますと、そうした過去の意味が失われてきます。ということは、過去になした行為によって、目に見えない未来に、悪いところへ行くこと

いわれても、ピンとこないということになります。現代人にとって、過去は常に取消可能なものなのです。

個人が大切だということは、自分の個人としての欲望が大切だということになります。

(二四一) 読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおざりになるならば、つとめ慎む人が汚れる。

「読誦しなければ聖典が汚(け)れ」という部分ですが、前の偈で解説しましたように、いま、聖典が読まれなくなつて来ています。聖典とは聖なる人の教えを書いたものですが、いまやそれを、ここから信じて読んでいる人は、ほとんどいません。たとえ僧侶が読んでも、信じていませんから、間違つて解釈したり、批判したりします。それを、凡聖逆謗と言います。ですから、釈尊の時代は、これは「たとえ」だったのですが、いまや現実のものとなっています。

最後の「なおざりになるならば、つとめ慎む人が汚れる」という部分ですが、前の偈でも述べましたように、私たち人間は、悲しいかな、成長の過程でここに垢を付けてしまいます。その垢は、ひたすら、毎日、精進し

て磨くことで、除くことができます。そうしないと、自分が垢を付けていることすら、気付かなくなってくるのです。

その垢や汚れを取り除こうと「つとめ慎む人」が、そのことを「なおざりにするならば」、自らの汚れを落とすことは勿論できませんし、結局は、汚れを増やしていくことになるのです。

私が、初めてヨーガに出会ったのは、佐保田鶴治先生のテレビでの話とその著書でしたが、先生は、常に「毎日のヨーガ」と申されていました。

ヨーガや瞑想は、毎日、毎日、行うことが大切なのです。「なおざりに」して、時々、気の向いた時にしたのでは、効果は期待できません。かえつて「ヨーガをしている」という執らわれが増えるだけです。

最近、私に「絶対(神・仏)があるなら見せてくれ」という学生がありました。私は、その時、「私のところで十年間、壁に向かつて坐つて下さい。そうしたら見せてあげます」と言いました。つまり、こちらの垢を坐る(瞑想・ヨーガなど)ことで拭い去るとき、絶対が勝手に見えてくるのです。しかし、偈の通り、それをなおざりにしないで、やり通すことは、偈に詠む価値があるほど、難しいことなのです。

後記

一、よく雨が降ります。これも異常気象なのでしょうが。
 二、わが家の玄關灯の上に、つばめが巣を作り、五羽が孵（かえ）りました。そして、もう巣立ちました。とても早いのに驚きます。なにか、自然保護に貢献できたようで、うれしくなってきました。ツバメさんありがとうと言いたい気持ちがあります。
 三、堆肥を新たに二山積みしました。刈つてあつた草を集め、四十〜五十年前のものでしょうか、山城の家にあつた「かいばきり」で二十センチ程度に切り、水をかけるとは、消石灰と乾燥鶏糞の間にはさんで、積みました。すぐに発酵しはじめ、おおつたシートに手を当てますと、とても熱くなっています。発酵ぐあいをみて、一〜二週間、はじめての積替えをします。三〜四回は積み替えをしなればならないと思います。
 四、根きり虫が、夜出てきて、大根やさつま芋やうづら豆の出始めた茎を食いちぎります。夜、電池で照らしながら取りますが、それでも取りきれず、やられます。適当な農薬はないようで、被害が出ています。
 五、サトウキビを一畝余り植えています。これも害虫のせいで、かなり発芽しないものが出ました。できるだけ農薬は使わないようにしていますので、しかたないこ

となのだと思います。

六、有機農法が進みますと（堆肥や有機物を入れていても、少なくとも三年ぐらいはかかるそうです）、病害虫におかされることも少なくなるそうです。期待して、できるだけ、堆肥などを入れて行きたいと思っています。
 七、今年は、特に、雑草刈りをこまめに行っていますので、かや（すすき）が生き活きとしています。家からでも、風にたなびく姿がとてもきれいに見えます。こんなにきれいだつたのかと、あらためて毎日、鑑賞しています。
 八、先日、畑の近くで、ホタルを見ました。まだ、この辺りでは、自然が残っています。

月刊 こころのとも 第九巻 六月号 （通巻 一 一 二 号）	平成十年六月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（しょうせい）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

